

巨樹・巨木シリーズ36 愛知県-4

細田木材工業株式会社

顧問 細田 安治

「巨樹・巨木は」とは、見れば見るほど、知れば知るほど、新たな視点が加わり、想像が膨らみ、力が入り、興味が尽きない。愛知県も実に奥深く、ここで終わりにするのは残念だが、今回で書き止めとし、来月号は三重県に進むこととする。資料を提供してくれているU氏の足跡をご紹介します。

写真番号1 樹番号31 玉林寺のクス

樹齢推定600年 樹周8.4m 樹高20m 愛知県豊川市麻生田町松原 豊川市指定天然記念物
豊川市案内板より。

クスノキとは、関東以西の暖地に自生する常緑高木で防虫剤として使われる天然樟腦^{しょうのう}の原料にもなる。5月頃黄白色の小花をつけ、花が散った後に黒色の小形の実を結ぶ。成長が早く、病虫害に強いことから巨木が多くみられる。本樹は目通り約9mあり枝の広がりには18mにも及んでいる。

<筆者のつぶやき>

玉林寺の創建は延徳3年(1491年)といわれるが、本樹の樹齢は600年以上と推定される。この巨木が芽を出したのは戦国時代室町幕府の後期と推定する。このように調べるのも楽しみの一つだ。

室町幕府最後の将軍足利義昭が織田信長に追放され、明智光秀「本能寺の変」の大きな要因となったと歴史は伝えている。もう少し調べると1568年信長は足利将軍義昭を助けて京都入りし、15代将軍にした。義昭も最初の内は信長を「お父さん」と呼び親しんでいた。しかしそれも時がたつにつれて信長は義昭の行動を制限すべく「勝手に動くな」と5カ条の覚書を義昭に送った。これにはさすがのおとなしい義昭も激怒して、京都南の槇島城で兵をあげ、信長に反旗を翻した。しかし戦いは抗せず京都から追放された。

一方明智光秀は、秘かに足利義昭を奉じ、足利幕府の再興を願っていた。義昭から「信長の動静を逐一報告せよ。光秀お前が頼りだ」と言われていた。そんな矢先、安土城での徳川家康の接待で「料理が腐っている」と信長が難癖をつけ家康はじめ大勢の家臣の面前で、罵倒され、その上しつこく殴りつけられ蹴とばされた。これにはさすがの光秀も、堪忍袋の緒が切れ、「敵は本能寺にあり」として信長を襲い自刃に追い込んだ。しかし、遺体は見つからず大きな謎と、後世に伝えられている。

このくだりは大河ドラマの「豊臣兄弟」の受け売りだが、豊川市玉林寺の大クスは「本能寺の変」と同時代に芽を出し、今日、大クスとなって登場している。このように歴史をたどるのは面白く楽しいものだ。

よくよくこの巨木をみると、地面にしっかり両足を踏みしめ、両腕

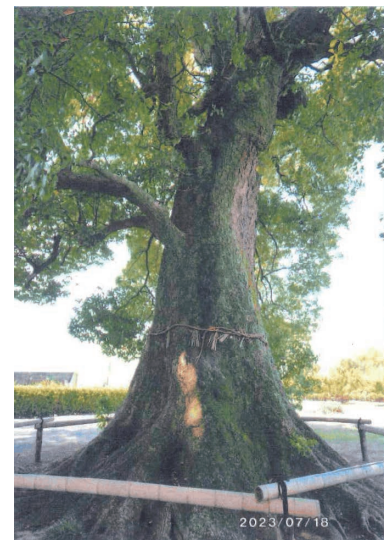


写真1 玉林寺のクス

を伸ばし体を斜めに反り返している。この動作は、ラジオ体操第二の九番「体を捻じ曲げる運動」の樹木版と見えた。根元もしっかり「微動だにせず」地面をつかんでいる。「明智光秀の執念が乗り移ったか」とも思えるような雄姿を思わず力強いクスノキとみた。いかがでございましょうか・・・???

写真番号2 樹番号34 清田の大クス

樹齢推定1000年 樹周11.7m 樹高22m 愛知県蒲郡市清田町下新屋 国指定天然記念物

案内板より。

古くから地元で親しまれてきた樹齢約1000年のクスノキである。目通り14.3m、根廻り13.6m、樹高22mで、大きさでは中部地方第一と言われている。『本邦中部ニオケル樟ノ巨樹トシテ代表的ナリ』として、昭和4年(1929)、国の天然記念物に指定された。明治初期まで、このあたり一帯は巨大なクスが何本も生い茂るクスの林であったという。その後、農地や宅地の開発等で次々に伐採されて、この1本だけが残ったと伝わる。

蒲郡市のホームページより。

蒲郡の隠れたシンボルとして有名である。愛知県下では最大で、中部地方の代表的なクスの巨樹。切株の上に10畳の座敷が入るほどの大クスで、八幡太郎義家の奥羽征伐の記念樹とも言われている。八幡太郎義家と言えば源氏の大將軍の一人である。

<筆者のつぶやき>

樹齢推定1000年といわれるのには生物学的な根拠もありそうな巨樹である。その一方、この大クスはそれほどの樹齢をもつとは思えないほどのエネルギーにあふれ、筋肉隆々マッチョ的な巨木である。近寄れば弾き飛ばされそうな迫力があり、このクスノキを見ていると樹齢1000年のパワーをもらえそうだ。自然のパワースポットめぐりとしておすすめの場所、といわれているのもうなづける。



ラジオ体操第2 9番
(体を捻じ曲げる運動)



写真2 清田の大クス

写真番号3 樹番号36 熱田神宮の大クス

樹齢推定1000年以上 樹周7.7m 樹高21m 愛知県名古屋市熱田神宮 愛知県指定天然記念物
案内板より。

境内には多くのクスノキが茂生している。そのうち特に大きなものが7本あって俗に7本楠と称している。このクスノキは、弘法大師がお手植えと伝えられ樹齢は1000年以上と言われている。

<筆者のつぶやき>

案内板には多くの説明がなされていない。だが筆者には、熱田神宮に多くの思い出がある。約半世紀前の思い出だ。木造建築が盛んだった時代である。愛知県のご紹介が始まったときから、この熱田神宮

の巨樹が出てくるのを楽しみにしていた。当時熱田神宮では、銘木、原木市場が開かれており、筆者も参加していたからである。

約50年前、この一帯、堀川、白鳥貯木場、名古屋は日本一の銘木、原木の集散地であり、流通の中心地であった。熱田神宮は堀川のそばにあり、境内も広いことから市が開かれることとなったと思われる。

熱田神宮近くの堀川、白鳥貯木場、名古屋に材木の集散地ができた理由は江戸時代に遡る。天下人となった徳川家康の名古屋城の築城、そして城下町づくりの木材を供給していたのが、この堀川を中心としたこの一帯の木材商たちだったからだ。

ここで、家康の名古屋城構築と名古屋の町づくりが、江戸城構築と江戸の町づくりと同じであったことに気づいた。以下の表に示すように家康は江戸開発とまったく同じ手法を使って名古屋を開発したのではないだろうか。

特筆すべきは、物流を水運に置き換えたこと。水運を使って江戸、名古屋をともに交易の中心として発展させ、徳川300年の礎を築いた徳川家康の手法は見事としか言いようがない。家康の偉大さを再認識した次第である。

	江戸	名古屋
海	江戸湾	名古屋湾
大 運 河	小名木川	堀川
小 運 河	縦横碁盤の目	堀川中心碁盤の目
幕府貯木場	猿江材木堀	白鳥貯木場
木材の集積地 流通の中心	木場	堀川周辺名古屋の木場
中心的神社	富岡八幡宮	熱田神宮
入札場所	江戸時代八幡宮境内 料理屋	熱田神宮会館(1970年代)

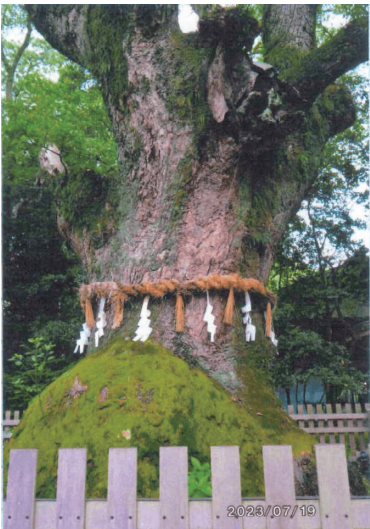


写真 3 熱田神宮の大クス

写真番号 4 樹番号40 大田の大クス

樹齢推定1000年 樹周9.5m 樹高12m 愛知県東海市大田町上浜田 東海市指定文化財第三号(天然記念物)

案内板より。

樟(くす)はクスノキ科の常緑高木で暖地に成育し木全体に芳香を有する。この樟は本幹に大きな空洞あり、洞窟に祠があって「楠王大龍神」が祭ってある。樹齢800年とも1000年とも伝えられている。樟は、昭和45年(1970)に「市の木」に選定された。

＜筆者のつぶやき＞

見るからに荒々しく、しめ縄は緩めに二重に回している。筆者の第一印象はこの巨木を閻魔様か仁王様と見たがちょっと違う。はたまた十字架を背負ったキリストか??では大相撲の横綱の土俵入りか、これも違う。混乱してきたが、ここは冷静にと踏ん張って写真とにらめっこした。

2つに分けて考えてみると出てきたぞ。手前が人間、なにやら両手を広げ背中に大きな荷物を背負っている。丸太のようなが、丸太を背負ってどこへ行くのかがわからない。そのうちに後ろの荷物が恐竜に見えてきた。皆様いかがでございましょうか。ほかに何か見えませんか・・・、見えたら教えてください。

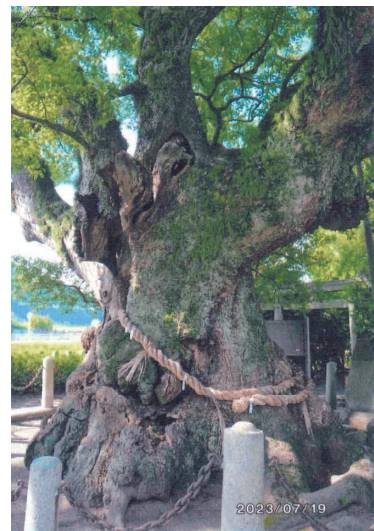


写真4 大田の大クス

写真番号5 樹番号41 かみながらしんめいしゃ 上水良神明社の大シイ

樹齢推定1000年 樹周6.8m 樹高約8m 愛知県西尾市上永良町宮東 国指定天然記念物
案内板より。

この神社の創立は貞観年中(859～77)と伝えられ、寛永二(1625)年本殿の再建には秀吉と家康に仕え、のちに伊予の国(愛媛県)松山の城主となった、加藤左馬之助嘉明よしあきがこの地の出身とされるため特に力を注いだ。そして嘉明は神職らに「加藤」の姓を与えたと言われ、境内に昭和初年に生誕地の石碑を建立された。(中略)この大椎の主幹は枯死し、二本の枝幹と周囲に萌芽した「ひこばえ」が繁茂している。

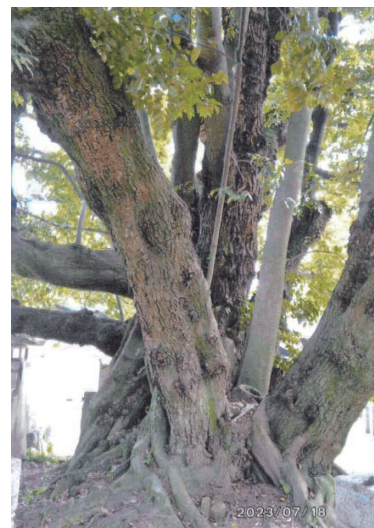


写真5 上永良神明社の大シイ

＜筆者のつぶやき＞

このシイの巨木は樹齢1000年と推定されているが、一見した感じはとてとても1000年の高齢木には見えない。枝を四方八方に延び巡らし、他を寄せ付けない風情である。昭和7年(1932)に記念物に指定されたともなれば、指定からの年月でも100年近い時間が経過している。

案内板では主幹が枯れたとあり、枝幹と「ひこばえ」で辛うじて生き延びているように聞こえるが、ドッコイ、このシイノキはまだまだ、青年期どころか、このしぐさは、四方八方枝を伸ばし、わがままいっぱいのやんちゃ坊主に見えるがいかがなものか??自然の生命力、しかも木の生命力の力強さに改めて感動した次第である。

この感動を八月の学びの結びとさせていただきます。続く